

## 令和5年度第2学期終業式式辞

おはようございます。穎明館生の皆さん、朝晩、大分冷え込むようになってきましたが、元気にはしていますか。2023年、令和5年ももうすぐ終わります。5月にコロナの感染症上の分類が、第5類に移行して以来、急速に社会全体が動き出したように感じてきました。こうして大教室で穎明館生全員の顔を見ながら話ができるようになり、本当に嬉しく思います。

さて、穎明館では2023年、令和5年には大変喜ばしいことの一つとして、海外体験学習を4年ぶりに行えたことが挙げられます。4年生のUSA・カナダ体験学習、5年生はその代替としてのオーストラリア体験学習、いずれも実に有意義な成果を収めました。4年生、5年生の皆さんの心にも様々な体験や学び、思い出が刻まれていることと思います。穎明館の教育目標は「国際社会に羽ばたく真のリーダー育成」です。まずは国境を越えて日本の外の世界を見るというのは、国際人、グローバル社会に生きる人間としての第一歩でしょう。穎明館生の皆さんには、これからも機会を見つけて、どんどん海外に出てほしいと思います。

ただし、真の国際理解とは、自国理解の上に立った他国理解である必要もあります。かつて来日したドイツの建築家、ブルーノ・タウト氏は、「日本人は礼儀正しく勤労意欲が盛んで勉強もよくする。しかし、あまりにも自分の国について知らなすぎる」と言いました。いくら国際化、グローバル化といっても、他者や他国から学ぶことばかりであったら、友好関係は結べません。穎明館でも自国理解のための中学生の体験学習として、2年生で広島、3年生で奈良京都を実施しています。また、日常の授業、学びの中でも、日本、日本の歴史や文化の理解を深めていることと思います。そこで今日は改めて今、皆さんが楽しみにしているであろうお正月を含めて、「日本」について考えてみたいと思います。

1月1日、元日、初日の出を拝みにいきますね。皆さんも拝みに行ったことがありますか。新年に計画している人もいますか。テレビなどでも中継されますね。実は日本人は100年ほど前には、毎日毎日、朝日を拝んでいたそうです。多くの人が毎朝、太陽を拝んだと言われます。私たちが生きているのは太陽のエネルギーのおかげである、ということを大切に思っていたのでしょう。私たちの命の源は太陽だ、つまり生命の原因は太陽であるということ、私たちの祖先はとても大事にしていました。日本は昔、「日の本」と言われましたが、この「日の本」の「の」が抜けて「日本」という国名が生まれたわけです。国旗を見ればわかりますが、太陽と人間を結びつけて、太陽を崇拝した国は、日本の他にも多くあります。しかし、太陽が人間の生命の根元であることを、「日の本」すなわち「日本」という国名ま

でにしたのは日本だけです。日本人の心とは、太陽に感謝して、みんなで仲良く太陽の下に生きるものだった、と言われます。ちなみに、今年創立 100 周年を迎えた堀越学園、兄弟校の堀越高等学校の校訓は、「太陽の如く生きよう」です。今度のお正月、初日の出には、とくに太陽を、そして日本人の心を、意識してみてください。

ところで、お正月をはじめ、日本人の伝統文化を我々の日常生活の中に探る学問を民俗学と言います。民俗学研究の先駆者として有名な柳田国男は、著書『先祖の話』で、日本人の固有信仰について、こう記述しています。

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、恐らくは世の初めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

私たちの問題になるのは、まず最初に正月に祀る神、本来本家が当然の中心となって、この一年の始めの日に、祝いかしずいていた神はどういう神であったか。

唐突な印象を受けますか。少し解説します。古来、伝統的な日本のお正月では、歳神様を迎えるために門松を飾り、歳神棚をつくり、歳神を迎え、供物としての餅（鏡餅）をお供えしてきました。家族は餅の入ったお雑煮をいただき、時期が過ぎて神様が去った後は飾り物を片づけ、日常に戻りました。

このお正月と似ている伝統行事にお盆がありますね。日本各地で異なる要素がありますが、その基本的な特徴は三つです。迎え火で霊を迎え、家で霊を祀り、送り火で霊を送る。祖霊のことをご先祖様と呼んでいる地域が多いですね。ご先祖様は、その強い力で子孫を守り、幸福をもたらすと信じられました。また、ご先祖様は行き来する神であり、稲の栽培期間は田の神、それ以外は山の神、山と家を行き来し、家がある限り呼ばれれば訪れる、家族と親しむ神としても考えられてきました。すなわち柳田民俗学によれば、日本人の固有信仰とは、山と稲と家を結ぶ祖霊を信仰するものであり、祖霊信仰のために子孫繁栄、家は永続しなければならないものなのです。

柳田国男は「どうあるべきかを考えるためにどうであったかを考えたい」とも言っています。私には、「我々が知らず知らずに受け継いでいる伝統、常識に目を向けよ」と、問いかけているようにも聞こえます。例えば、「家」の永続と、西洋的な価値観である「個人」の尊重の調和をどう考えたらいいのでしょうか。明治以来、抱えてきた「伝統と近代」の問題が、そこには横たわっています。近代化のなかで日本の伝統文化も変容してきました。皆さ

んのなかには日本の伝統文化を、あまり意識していない人もいるのかもしれませんが。それでも皆さん、年末年始、薄れつつあるとはいえ、日本的な文化や伝統が身近に感じられることもあるはずです。例えば、初詣。コロナ前には日本全体で毎年約 8000 万人が初詣をしていました。日本人は宗教心が薄いと言われますが、そうでしょうか。これは宗教行動というよりは習俗でしょうか。ぜひ意識して伝統に目を向けてみてください。そしてその意味を調べ、考えてみましょう。冬休みは短いですが、身近な生活文化、風習に目を向けてみる絶好の機会だと思います。皆さん一人ひとりにとっての「日本」理解が深まることを望みます。

穎明館の創立者、堀越克明先生は、俳人松尾芭蕉の「不易流行」の言葉を好んで用いられていました。「不易流行」とは、新しさを求めてたえず変化する流行性の中に、永遠に変わらない不易の本質があるということです。変化しない本質的なものと新しい変化を忘れない。そのために、まずは自己を知ること。自分の国の文化や伝統の価値を知ることです。人から教えてもらうことばかりではない。自己に目を向け、自己を知り、自国について学ぶこと。他人から学ぶとともに、他人からの評価に対してぶれない自分というものをしっかりと確立することも大切です。そして多様性の時代と言われる今日、自分が大切にしているものと同じように、他者、他国の人が大事にしている、それぞれの国の伝統や文化などを尊重する態度も求められているのです。

今日は「日本」について、太陽の話、そして柳田民俗学にみられる日本人の固有信仰、伝統と近代、不易流行の話をしました。穎明館生の皆さんが、日本への理解を深め、日本に生きる自分の人生に太陽のエネルギーを感じながら、世界の隅々まで視野を大きく広げて、多様な人たちと友好的な人生を送ることを期待しています。

6 年生、37 期生の皆さん、追い込みの受験生にとっては、お正月どころではないでしょう。「苦しい時の神頼み」も皆さんには必要ないはずです。年明けの本番の後に、「盆と正月が一緒にやってきた」という結果を信じて、最後の最後まで努力を続けてください。いつでも応援しています。

穎明館生の皆さん、健康安全に穏やかな気持ちで年末年始を過ごしましょう。皆さんが、太陽のエネルギーを得て、伝統と近代、不易流行をふまえた新たな決意で、新年、3 学期を迎えることを願っています。

以上、令和 5 年度第 2 学期終業式式辞といたします。